

佐賀県立博物館・美術館報

佐賀市城内1丁目15番23号 TEL 0952(24) 3947

No.88



『富士山（三保にて）』 岡田三郎助（1869～1939） 137×197 大正9年（1920）

岡田がえがくものにはそれが人物であれ、静物、風景にしても、えらばれる題材、構図、そして色彩のすべてにおいて、すでに古典的ともいえる形式をつくりだしている。

本図もやはりそうした典型的な画題と構図をえら

び、富士のもっと美しい容姿をねらったものである。和田英作が大正6年に制作した『暁の富士』、御物『朝陽富士図』とまったく構図を同じくしており、岡田のはいっそ平面性と装飾性において、際立つたものとなっている。

目 次

○『富士山（三保にて）』	表紙
○研究ノート「岡田三郎助の風景観」	2～3P
○博物館講座講演要旨「東アジアの支石墓と墳丘墓」	4～5P
○企画展記念講演要旨「古墳出現の背景」	6～7P
○行事のお知らせ	8P

岡田三郎助の風景観

岡田三郎助の風景画の変遷は、森口多里著『明治大正の洋画』(昭和16年刊)の「岡田三郎助—その藝術の展開ー」の項において知ることができる。それは、岡田の初期の風景画について、とくに岡田が久米桂一郎、黒田清輝と出会う以前の、すなわち大正館時代にえがかれた作品について、色彩の手掛りを与えてくれる。

岡田は昭和14年(1939)、70歳で没し、翌15年、東京府美術館で500余点の遺作を集め、展覧会が開催された。森口多里の岡田三郎助論は、このときのまだ記憶に新しい岡田作品のイメージをもとに著わされている。爾後、大戦をへて、岡田の初期の風景画をまったく見ることができない今となっては、この森口による岡田作品についての記述はとりわけ貴重である。さらに岡田自身が語る画論が、趣味的、散文的な美術論は別として、皆無という現状では、岡田の風景画観を考察する上で、我々は、この記述を出发点としなければならないだろう。

さて、その述べるところにしたがい、森口の年代史的な記述から、ここでの関心である「風景画」について、岡田の画風の推移を確認しておきたい。

まず、さきの遺作展において、制作年がもっとも早い作品は明治23年(1890)、岡田21歳のときの作品で『長崎にて』と題されている。現在この作品はモノクロの写真によってしか判断すべき手立てではないが、さいわい、この作品の色使いについて森口の報告がある。それによると「色調は暗く、脂色の調子で整えられ、空は淡紅の光りを含んで仄りと明るい」と述べられている。そしてこの特色が、この時期の他の作品にも当てはまるとしている。

それが、やがて、明治27、28年頃の「細部にこだわらないで、全体の大気を出さうといふ意欲に向つたものらしく、色調に於ても紫、黄、エメラルドなどが主」となるような風景画がえがかれるようになる。もちろん、この間の変化は明治美術会の脂っぽい色調の画面から、外光派の明るい作風への発展を見ることができるが、もうひとつこれに伴う変化として、「透視図的效果」を意図した構図への依存が薄められ、画面をまとめるにあたって、「横に水平に引くタッチで統一」しようとする筆触がつくりだす材質感への関心があらわれてきていることが指摘される。このことは思うに、構図を主体にしたイリュ-

ジョンから、色彩によるイリュージョン効果の重視への移行と考えることができるだろう。

また、こうした移行の結果、構図そのものについても、「透視図的效果」よりも「水平の線のはっきりした構図」を選ぶようになった。

これがおおよそ渡欧(明治30~34年)までの画風の推移で、渡仏によって、岡田は、「却って外光派以前に逆戻りした」かのように、いくぶん沈んだ色調に、バルビゾン派にみる情感をただよわせることもあった。

帰国後の顕著な特色は、「日本の野草に対する愛情」と、それを人物画の背景としてえがき込む手法の発展である。そして西欧文化にふれた多くの洋画家と同様に、岡田においても、この帶域経験を境にして、岡田自身の風景画が展開されることになるのである。

私見によれば、ここで留意しなければならないことは、この卑近な草花をえがくことが、ただちに黒田清輝の同じような風景画(草木画)とは、同一のものではないということである。つまりえがわれるモチーフは共通するにしても、黒田におけるそれは、どんな卑近な草木図でも、時々刻々に変化する風景に抱かれた一コマであったのに対し、岡田のそれは、その一コマにおいて完結しようとするかのようなのである。岡田が、黒田のえがくような動きを孕んだ雲の表情をとらえようとしないのと同じように、岡田の草木図は、まるで人物の背景幕であるかのごとくに静止したかのようであり、それは人物画の背景として、いわば閉じられた風景を予告しているかのようなのであった。

では、なにゆえ岡田の風景画が閉じようとするのか。それは画家が意図したものなのか。それとも画家に備わる本質的な何かなのか。このことを見極めるためには、ふたたび岡田の画歴にしたがい、さらに歩みを進める必要がある。

大正から昭和にかけて、岡田の風景画において、ふたつのことが我々の注意を喚起する。

ひとつは、富士山をえがきはじめることがある。それらはスケッチとしてえがかれたものもあれば、大画面に構成されたものもある。なかでも大正9年(1920)に制作された『富士山(三保にて)』(表紙図版)は、そうした作品の頂点に位置するものであった。

これら富士山図は、一方の「名もない風景—どこにでもある風景—」と対比されて典型的な(パラダ

イムとしての）風景の図像をつくりだしていた。それは我々日本人の歴史の中で、つねにくり返し表現されてきた図像であった。岡田はこの「歴史に閉ざされた」風景を、ここにおいて断固として継承するのである。

しかし岡田は他方、「どこにでもある風景」からやはりひとつつの典型をつくりだすこととした。それが水辺の柳をえがいた一連の作品（図版1）で、これらは、元号が昭和に改まつたところでえがかれることになる。そしてそうした一連の作品の到達点を示しているのが御物『楊柳』であった。

ところで、これら水辺の柳をえがいた作品にはきわめて強い形式主義、あるいは共通の形式概念がうかがわれる。

岡田はその題名が明示するとおり『コローの池』をやや視点を変えながらも6点えがいている。しかもこれらがえがかれたものは昭和5、6年の歐州出張時であり、ということは、それ以前に岡田は、水辺の柳を題材としてえがいていたことになり、それらをえがくなかで岡田はすでにコローの構図（図版2）を援用していたのであった。

しかし岡田は帰国後、『コローの池』と『楊柳』をついに深めることはなかったといえる。むしろ岡田の晩年の風景画に見られるのは、箱根、伊豆などを題材にした山間の風景であり、丘陵の高みから遙かに遠望する山並をえがくという風情で、「革新的な表現で人を導くものではなかったが、確実な技法と温雅な画面で人を惹きつけるものであった」（森口多里）のであり、このことは岡田が晩年健康にすぐれず、かえってそのことが、森口がいうところの「年の経つに従つて却つて益々外光の明るさに若々しく且つ健康に執着したことを物語つてゐる」と見ることもできよう。が、しかし、昭和の初年から滞欧時にかけての楊柳を題材とする構図を、コローに範をもとめ、のちに渡欧した際、コローの故地を訪ね、コローの風景画の淵源をさぐろうとした岡田の内的欲求と、同時に平行して進んでいた富士山図制作における、日本人としての内的（歴史的）な束縛の視覚化は、ともに「日本近代の風景」のひとつつの典型をつくりあげようとする試みであったということを、我々はここで確認しておかなければならない。

岡田の富士山図が、和田英作の富士山図とともに、風景における権威形成のための重要な仕掛けであったことは、十分に考えられることであるが、それとともに、どこにでもある、いわば「武藏野的」風景も、なおかつ、ひとつの典型化がおこなわれようと

していたのであった。こうして、「どこにでもある風景」は自立した風景として、『楊柳』にみるように典型化していくことで、「どこにでもある風景」は「富士山図」への上昇志向をとげようとしたのである。

そして他方、当然この過程にあっては、「どこにでもある風景」のうち、草木図においては、先述の人物像の背景へと転化することによって、おのずと風景としては、ほんらいの自由な広がりの予感をみずから閉じてしまい、なおもそれは、人物像との図様上での交遊一たとえば『萩』における背景の小花と少女の着物模様の揚羽蝶との交歓一をきっかけとして、ますます風景は内向きに閉じられたものとなっていくのであった。

しかしここで我々は、さらに岡田が、人物画（肖像画）においても「富士山図」的な典型をもとめ、意図していたとはいまだいえない。このことについては、おそらく、これまで述べてきたことだけからは解決がつかない問題であろう。人物画におけるモノトーンの背景を風景の極端な例とみなし、そこについたまでの段階で、風景と人とのさまざまなパターンを考えるとき、岡田がえがかなかったものーたとえば久米桂一郎における風景と人ーのなかにもうひとつ風景の典型化が認められるのであった。

ともあれ、これまでのところから結論を述べるならば、岡田が風景画においてもとめたものは、作品における規範的な統一典型一であった。そしてこの統一形式こそが、アカデミズムの本質であり、ここにおいて作品は閉じられなければならなかつたのである。

(学芸員 松本誠一)



図版1
「水辺の柳」
1927



図版2
「モルトフ
オンテヌ
の思い出」
1864

東アジアの支石墓と墳丘墓

九州大学文学部

教授 西谷 正

吉野ケ里遺跡には支石墓があります。ちょうど1m50cm~2 mくらいの四角い平べったい大きな石を人の頭ぐらいの石で支え、格好よく座らせている、こういうお墓を支石墓と呼んでいます。

福岡県新町遺跡の場合は、長方形の穴を掘り、そこに人を埋葬しています。長方形の穴のことと土壤と言います。埋葬施設は土壤墓が一般的です。又、木棺や漆棺ですね、小形の漆棺が多いんです。たまに石棺もあります。支石墓が日本の稻作りが始まる時期に北部九州を中心として現われてきます。佐賀平野に確認されたのは大和町の尼寺南小路遺跡で16年前の事です。

またそれから北へ2 km程に礫石遺跡というのがあり、やはり支石墓が見つかっています。さらにそこから3 km程東に佐賀市久保泉町の丸山遺跡があります。118基というとてつもない数の支石墓が見つかりまして、現在では、この佐賀平野に14ヶ所以上の支石墓があることがわかつてきました。佐賀平野といいうものが日本において、あるいは北部九州においても支石墓の重要な分布地域の一つになってきたわけです。

それでも日本あるいは北部九州における支石墓の最大の密集地域はやはり唐津地域です。そして北松浦郡、さらに糸島郡、そして佐賀平野、島原、大牟田から熊本という数ヶ所で、支石墓の密集地帯が見られるということです。こういった支石墓は縄文時代の晩期から弥生時代の中期にかけて、つまり日本の稻作文化の形成期に北部九州の一角に見られるわけです。その間に形式も変化していますが、古いものは西北部に多いようです。

一方、その有明海を挟んだ対岸の熊本県北部から大牟田にかけての辺り、大牟田市の羽山台遺跡があります。支石墓とは申せ、支石が一つだけの支石墓です。その下に漆棺があり、弥生時代の中期の初め頃という事で支石墓の終わり頃だということが分つてきました。これと非常に似たものが、尼寺南小路の支石墓です。弥生時代の前半くらいいの支石墓が有明海を挟んで、佐賀平野そして対岸の大牟田辺りにもある、そういうことから私はこの熊本北部から福岡南部にかけての支石墓というのはひょっとしたら佐賀平野から有明海を渡って伝播したのではないか

かと思います。最初は唐津地域に入ってきたんではないかと、そこから東の糸島の方へ、もう一方は、逆に西側へまわりまして長崎県の北松浦郡辺り、ずっと南下して大村湾のつき辺りの風鶴岳、さらには島原半島へと…。一方、唐津平野に入ったのが、JR唐津線を南下しまして佐賀平野に入ってくると…。そこで花開いて10数ヶ所、100基以上の支石墓が造られる。その次が有明海を渡って熊本北部から福岡南部まで伝播した、このように私は今のところ、年代的な流れ、あるいは構造上の変化から考えたいと思っています。

それではそういう日本の支石墓はどこから入ってきたのでしょうか。支石墓だけではなかなかどこからということは困難ですが、農耕文化の形成期にその要素の一つとして入ってきたということを考えると、まちがいなく朝鮮半島南部の農耕文化に起因するのではないかと考えます。世界の中でもこの東アジア、とりわけ朝鮮半島は支石墓のもっとも発達した地域なのです。朝鮮半島全体で何千、何万という支石墓が造られていると思うんです。

朝鮮半島の支石墓は大きくわけ、二つのタイプがあります。その一つはテーブル式という文字通り机の格好をした支石墓があります。もう一つは基盤形の支石墓があります。圓基の基盤形のです。これは地面に手頃な石を置き、その上に巨石をのせます。巨石が薄べったいものもあれば、また、ものすごくぶ厚いものもあります。もう一つの特徴は、見つかる地域も違います。テーブル形は主として朝鮮半島の北部にありますので、その地名から北方式支石墓と言い、それに対して、この基盤形は朝鮮半島の南部に主として分布しており、南方式支石墓といいます。日本の支石墓をこの分類で言うとみな基盤形です。そういうことからも、日本の支石墓の直接の源流は朝鮮半島の南部地域であって稲作の技術と共に一つの農耕文化として入ってきたと言えます。一方、北方式は最近では朝鮮半島でも全羅北道辺りまで広がっていることがわかつててあります。北部のみならず、この北方式支石墓はさらに現在の中華人民共和国の東北地方にも分布している。どうやら支石墓は、中国の東北地方で発生して、その同じ形のものが朝鮮半島北部から一部南部まで伝播てきて、その伝播の過程で基盤式というが生まれて、その基盤式の一部が日本に入ってくるのだと思います。支石墓というのは、ちょうど稻作が日本に入って、定着していく過程で北部九州を中心としてみられたわけですが、中期の前半以降、弥生時代の農村があちこちにできる頃にはもう造られなくなってしまい

ます。

日本における墳丘墓の問題でありますと、吉野ヶ里が見つかった時に最初、紀元前後の頃のものであるということでした。その中から管玉とか銅劍がでてきました。また地元の方が今から35、6年前前漢の鏡らしい物を拾われている。これはもうすでに中国の漢の文化が日本に何らかの関りをもっている時期の墳丘墓であると最初考えたわけです。事実、最初はそれで良かったんです。その時期の墳丘墓というと福岡市の橋渡遺跡で見つかっていました。この墳丘墓からは全部で30基程の埋葬が見つかりました。ほとんどが甕棺です。一部、石棺とか木棺もありました。K-62甕棺には素環頭大刀と前漢鏡が入っていた。30基程埋葬されているけれども、そのたった一つです。一つの墳丘墓にたくさん埋葬している点で吉野ヶ里と共通しております。ただわからないのはこの墳丘墓がどういう形をしているかです。しかし、24mをこす墳丘墓であること、高さにつきましても2m余り残っております。

近畿地方でも大阪市の加美遺跡で巨大な長方形の墳丘墓が見つかりました。南北26m、東西15mあります。さらに周囲には幅6m～10mの広い幅の濠がめぐっています。この大きな墳丘墓の中に木棺墓23基の埋葬がありました。ほぼ中心に大きな木棺墓が埋葬されています。ガラス玉一つ、銅の鏡2つで、非常に副葬品が少ない。この木棺が二重になっておりまして、これは楽浪郡のあったビョンヤン市の土城洞4号墓などと同じです。つまり九州では墳丘墓があり、そこに中国の鏡があるということ、近畿地方では二重木棺墓がどうも大陸とつながりがあるらしいのです。

吉野ヶ里の墳丘墓、それから福岡市の橋渡遺跡、大阪の加美遺跡、こういった墳丘墓がいったいどこからくるのか？前漢の刀とか二重木棺から、どうも楽浪郡辺りの古墳と関係しているのではないか。弥生時代中期後半に墳丘墓が出現するということは鏡、銀の指輪あるいはまた、二重木棺にいたしましても中国の漢との関係で出てくるのではないかと。

吉野ヶ里遺跡の墳丘墓は、最初弥生中期の後半でした。ところが掘り進んでいくうちに200年くらいにわたって埋葬されていることがわかった。つまり、あの墳丘墓ができたのは、楽浪郡を通じて前漢と接触する以前である。その時代に墳丘墓が造られるわけです。いったいそれがどこから出てくるのか？この点について、いろいろな考え方があると思いますけれども、実は佐賀県のみならず北部九州全体に視野を広げ、弥生時代の比較的早い時代から、つまり

漢との接触以前に日本には弥生時代の墳丘墓がある。これは近畿地方の弥生時代前期の終わりに方形周溝墓といふ墳丘が1m～2mくらいに土をもっていますので墳丘墓です。九州でも方形周溝墓こそ見つかってはおりませんが、それに近いものが見つかっています。

福岡県の朝倉平野に、峯跡があります。これは弥生時代前期の初め、稻作時代に入った当初のお墓です。コの字形に18m×13mの周溝ができています。何と幅は3m程度あります。この内部から7基の土壙墓が見つかっております。これが稻作の伝播と共に近畿地方に伝わって方形周溝墓となるのだと思います。福岡県朝倉郡の辺りにあったということは吉野ヶ里で墳丘墓が出ても不思議ではない。その基盤はすでに稻作文化の始まりと共に朝鮮半島南部からアイデアが入っておったんじゃないかな。たった一つのデータですけれども、私はそう考えたいと思います。

実は朝鮮半島の南部、慶尚南道に苧浦里という遺跡があります。これも支石墓ですが、南北8.9m東西5.5mで、長方形の範囲に整然と石を積み上げ、土ではなく石で墳丘のような区画を造っています。石のかわりに土で造れば長方形の墳丘墓になる。まさにこういうものが稻作と共にやってきて、日本の墳丘墓を生み出したのではないかと思います。

佐賀平野が、この10数年間の調査を通じて日本でも唐津につぐ支石墓の密集地域であることがわかつてきた。首長にふさわしい立派な墓を造る、それが墳丘墓ではないか。すでに稻作文化と共にやってきたお墓を区画するという考え方が高い。墳丘墓を造り始めたのではないでしょうか。つまり弥生時代の始まりと共にその出発点はある。その源は朝鮮半島南部の先史時代のお墓にあるんではないかということです。このように弥生時代の稻作農耕文化の開始と発展の所産として、お墓の造り方においてもまず支石墓、そして又、墳丘墓が出てくるわけとして、当時の社会の発展の歴史と墓制の変遷とが非常に深い関係を持っているということなのです。

ともあれ、今日は佐賀平野の支石墓にしても墳丘墓にしても東アジア世界の広い視野の中で見ていく必要があると言うことを申し述べたわけでござります。

(平成2年1月27日 博物館教室にて開催)

古墳出現の背景

奈良県立橿原考古学研究所
副所長 石野 博信

ご紹介いただきました橿原考古学研究所の石野です。今日は古墳時代の始まりについて少しお話しさせていただこうと思います。古墳の出現の時期と言いますのは、ちょうど吉野ヶ里の村がどこかへみんな引っ越ししてしまった頃ぐらいで、その頃に最初の前方後円墳が作られたわけです。そうは言っても今日作った資料は、わりと古墳とは関係のない資料をたくさん入れております。それはテーマとして選んだ『古墳出現の背景』というところに少し気持ちを込めたのですが、今まで私は前方後円墳が、いつ、どこで現れるかというような事をを中心に物を考えたり話したりする機会が多かったのですが今日は前方後円墳という事から少し離れて、お墓以外のものから古墳出現の背景を見てみようと思います。一つは住まいの形、あるいは構造が弥生時代と古墳時代ではどう違っているのか。村の構造から比較してみたらどう変化して行っているのか。それから近畿地方を中心に山の高い所に防御用の村を作るという事があるのですが、それはいったい古墳の造営とどう絡むのかという事とか。あるいは弥生時代にも縄文でも古墳でもお祭りがあるので、そのお祭りのやり方が弥生と古墳でどう違うのか。そういうおよそ四つの点を柱に考えてみようかと思います。

まずは一番最初の弥生時代の家と古墳時代の家ですが、竪穴住居が主流という点では共通です。しかし大きく違いがあるのは住居の平面形が大きく変わっていて、弥生時代は上から見て丸い家で柱が5~6本あるという家がたくさんあるのですが、古墳時代になると四角い家で4本柱の住まいというのが主流派になります。もちろん地域的に多少例外はありますが、大きな流れとしてそういう事が言えます。

もう一つ住まいについて考えられる事はやはり壁ですね。竪穴住居は外から見て壁がないわけですが、地面よりちょっと上がった所に床面を作て壁が自然とでき、そしてそこに窓ができるという、こういう住まいが主体的に作られるようになるのもまた前方後円墳が作られる時期です。その証拠は前方後円墳が作られるようになると埴輪がたくさん作られますが、その埴輪の中に家の形をした埴輪がたくさんあって、その家を見てみますと全部壁があります。

という事は前方後円が作られる頃、そして前方後円墳に葬られるような人は竪穴ではなく平地の住居に住むようになったんだなという事がわかります。

もう一つ、奈良県の佐味田宝塚古墳から出土した家屋文鏡と呼ばれる有名な鏡があります。そこには2階建ての立派な建物と竪穴住居と、それから高床の倉と平地式の建物の4軒の建物が描かれてあります。ですから完全に平地の住居に切り替わったではなくて、一つの屋敷の中に竪穴住居もあれば高床の建物もあるし、平地の建物もあるというのが4世紀後半の偉い人の屋敷であるらしいと考えています。

次にたくさん住まいが集まって村ができるわけですが、この村の構造から考えたらどうだろうか。弥生時代に環濠集落というのがあって、それが吉野ヶ里遺跡の調査をきっかけとして世間的に有名になったんじゃないかなと思います。環濠集落というものは家がたくさんあって、その周りを濠で囲んでいる事です。ふつう幅3m前後の濠で囲んで、さらに堤を作って敵の侵入を防ぐ。これは弥生時代に特徴的な村づくりの形です。この場合は偉い人も一緒に住んでいるというのが一つの特徴といえます。ところが古墳時代になるとかなり様子が変わってくる。いわゆる豪族居館と呼ばれるようなものが出現していくわけです。その代表例として初めて確認されたのが群馬県で調査された三ツ寺遺跡です。この遺跡は幅20mほどの濠で囲まれた一辺80m位の方形の館跡です。濠の内側には人頭大の石を張り巡らしてあり、ところどころには出っ張りを作って外敵に対して矢をいかれられるようになっています。館の内部は掘立柱で仕切られていて、掘立柱の大型建物や竪穴住居跡があります。これが5世紀後半頃の前方後円墳に葬られるような人の館ということになります。その後このような豪族居館というものが全国的に注意されるようになって4世紀に遡るような遺跡も続々と見つかってきました。その中で一番しっかりしているのが大分県の小迫辻原遺跡で、ここでは一辺70mと50mの方形の館が二つ並んで検出されています。幅5m位の濠の内側はやはり濠で囲まれており、中には掘立柱の建物があったようです。

その他、最近では静岡県の大平遺跡で居館的なものと一般の竪穴住居群が同じ丘陵上に比較的近接して営まれている例なども見つかってきており、こういったものを経て小迫辻原遺跡のような居館が確立し、さらに三ツ寺遺跡のように隔絶性を強めていく様子がわかつてまいりました。

その次に村の立地という点から見ますと高地性集落と呼んでいる遺跡があります。弥生時代という時代は農耕を主にした時代であります。だから田んぼに近いところに村を作る。それなのに弥生時代に田んぼからの高さが100~200mという、そういう高い所に村を作っている。それを高地性集落といふうに呼んでおります。そういう村が盛んにつくられるのが弥生時代の中頃から終わり頃です。その辺と環濠集落の動きというのは当然関係があるだろうと思います。環濠集落というのはやはり敵が襲ってくる時に備えて村を濠で囲んでしまう。山の高い所の村も敵が襲ってくるのに備えて中世の逃げ城のように山のほうへ村をつくる。そういう考え方からすると動機は同じであって、対応の仕方がちょっと違うという事だと思います。

この高地性集落が盛んに作られるのは弥生時代中期の後半で、瀬戸内海の要所要所へ作られていきます。弥生時代の後期になると近畿地方の大坂とか奈良を中心とする地域にたくさんできます。近畿地方では弥生時代後期が終わって、弥生時代の土器だろうか古墳時代の土器だろうかもめている庄内式と呼んでいる土器が使われるような時期になるとばったりと高地性集落がなくなります。私は世の中が平和になったんだと、そして墓作りにエネルギーを集中できる時代になったんだと思っております。私がさっきから住居の形が変わるとか、村の構造が変わるとか言っているのは全部この時期のことです。日本の考古学者の中ではその次の段階に前方後円墳ができるというのが主流派の考え方なんですが、私は世の中の変化はもう一段階早いのではないかと思っています。それが墓だけではなくかわってもらいくらいから他の事からも考えてみようという事です。そういうふうな変化が高地性集落にもあります。

次に祭りの問題に入りたいと思います。この祭りというのはいろんな時の祭りがあると思います。生まれた時の誕生祝い、それから成人式から結婚式からお葬式というふうな人生のそれぞれの節々の大きな祭りもあれば、稲の取り入れの祭りとか漁に出る時の祭りとか、村中でやる祭りもあれば家の中でやる祭りもあるし、国でやる祭りもあるわけですね。その祭りの変化というのを何とか追えないだろうかという事を考えてみようかと思います。祭りの場所が固定するのはいったいいつの頃のことでしょうか。

弥生時代の祭りについては、どういう道具を使っていたのかまだよくわかつていませんが、ふだん家の暮らしでは使わないような用具を作りて祭りに使

うという事を一番早くやったのが九州の人じゃないかと思います。九州では筒形器台と呼ばれる高さ1m位の真っ赤に塗った土器が墓地などからたくさんでてきます。この祭りの時だけに使う道具があるかないかという事が非常に大事じゃないかと思います。この頃の近畿地方には祭祀専用の道具はありませんで、ふだん煮炊きに使っている壺とかふつうの壺などを祭りの場所にどんどん使っていたようです。そうすると考古学者が発掘しても、ふだん村の中でいっぱい使ってますからそういうものが出てきても、お祭りをやった場所だと決められない。そういう点でなかなか難しいのですが、最近近畿地方でも猪の下顎が穴の中から多量に見つかったりして、狩猟をやっている人達の祭りのような事が弥生時代にあったんじゃないかなという事がわかつきました。その他にも祭りの時に穴を掘ってきれいな水を汲んで、その水を皆で飲むとか、あるいはきれいな水で新しいごはんを炊いて皆で食べる。その穴に祭りの後、祭りに使った用具を納めて埋める。そういう事があったんじゃないかなと思います。それでこういった祭祀用具を納めた穴のあり方を見ていく事が重要なわけです。そうしますと弥生時代の場合は、穴のある場所が村の中の一定の場所には定まらない。それに対して前方後円墳が作られる時期になりますと場所が一定してくる。その代表的な遺跡が奈良県の纏向遺跡です。この遺跡は三輪山という神様の山の麓にあります、六つほどの村が運河でつながれたようなあり方をしています。そこでは古代の纏向川の中洲に大小35個の穴が集中していて、お祭りの場所がそこに固定されていたような状況を呈しています。この地域からは神社の拝殿を思わせる建物や機織りの道具・大量の糀穀・鳥形をかたどったミニチュアの舟などを埋めた大きな穴なども検出されており、農耕に関わる祭祀が行われていたものと推定されます。さらに注目されることは穴の中から愛知県方面の土器とか山陰地方の土器とかが出てきます。よその土地からきた人が一緒にお祭りをやっている。こういうことは弥生時代にはなかったことであり、そういう人の集まる、いわゆる都会に王の居館ができ、前方後円墳ができるわけです。

今日はお墓の事にはあまり触れずにそれ以外の変化から古墳時代の始まりについて考えてみました。また皆さんでこちらの状況なども踏まえて色々お考えいただいたらと思います。

(平成2年2月17日 博物館教室にて開催)

行事のお知らせ

〈平成2年度博物館土曜教室のご案内〉

回数	講座名	実施日	担当者
第19回	土器の復元に挑戦しよう	5月26日(土)	木下巧
第20回	鍋島綾通一いま・むかしー	6月16日(土)	宮原香苗
第21回	絵図にみる幕末維新の佐賀	7月7日(土)	尾形善郎
第22回	昆虫標本の作り方	7月28日(土)	宮崎武夫
第23回	近代の風景	8月25日(土)	松本誠一
第24回	肥前刀の美と系譜	12月22日(土)	竹下正博
第25回	手わざの美—佐賀の職人たちー	1月12日(土)	山崎和文
第26回	発掘のはなし	2月2日(土)	蒲原宏行
第27回	狩野派の絵画	2月23日(土)	福井尚寿
第28回	龍造寺氏について	3月23日(土)	樋渡敏暉

企画展

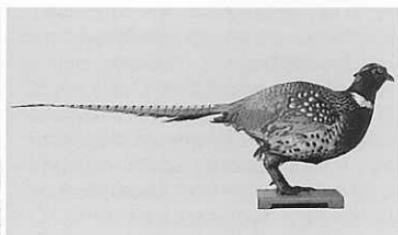
展覧会名	会期	会場
抒情の美 近代日本の美人画展	4月13日(金)~5月13日(日)	美術館

新収蔵品展

平成元年度に新たに博物館に収蔵（購入・寄贈・寄託）された資料の中から自然・考古・歴史・美術・工芸・民俗の各分野にわたる約950点を紹介します。



墨田川遠望図（長谷川雪旦）



コウライキジ（韓国産）

博物館・美術館報 第88号	発行	佐賀市城内1丁目15番23号
発行年月日 平成2年3月20日		佐賀県立博物館
編集出人 和人	印刷	佐賀県立美術館 印刷大同印刷